慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	第一次世界大戦の勃発とドイツ社会民主党：ドイツ社会運動史にかんする最近の資料（四ノー）
Sub Title	The outbreak of the first world war and the German socialdemocratic party : documents and materials of the history of German working class movement (1/4)
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.1 (1961. 1) ,p.49(49)- 61(61)
JaLC DOI	10.14991/001.19610101-0049
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610101-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

model of the U. S. 1929–1952.
(6) L. M. Koyck; Distributed lags and investment analysis.
(7) R. Eisner, A distributed lag investment function (Econometrica Vol. 28 Jan. 1960)
(8) P. G. Clark; A study in private investment; The telephone industry, studies in the structure of the American economy.
(9) F. Modigliani and M. Weingartner; Forcasting uses of anticipatory data on investment and sales. Q. J. E. Vol. 22 Feb. 1958.
(10) E. D. Domar; "Depreciation, replacement and growth." E. J. Mar. 1953.
(11) E. D. Domar; Essays in the theory of economic growth.
(12) 通産省「主要産業の設備投資動向」
(13) 経済企画庁編「戦後日本の資本蓄積と企業経営」
(14) 三菱経済研究所「綿と化繊の産業構造」
(15) 関桂三「日本綿業論」
(16) 守屋典郎「紡績生産費分析」
(17) 労働省編「主要産業に於ける労働生産性の動向」
(18) 〃 「綿紡績業労働生産性の概要」
(19) 日本化繊協会「労働生産性問題と化繊工業」
〔資料〕
(1) 日銀統計局「主要企業経営分析（調査）」
(2) 〃 「本邦経済統計」
(3) 三菱経済研究所「本邦事業成績分析」
(4) 通産省調査統計部「繊維統計年報」
(5) 日本紡績協会「綿糸紡績事情参考書」
(6) 〃 「日本紡績月報」
(7) 化繊協会「化繊ハンドブック」
(8) 〃 「化繊月報」
(9) 東洋経済新報社「経済統計年鑑」

資料

第一次世界大戦の勃発とドイツ社会民主党

——ドイツ社会運動史にかんする最近の資料（四ノ一）——

飯田鼎

一

いまここに紹介を試みようとするのは、ドイツ統一社会党中央委員会（Zentralkomitee der Sozialistischen Einheitspartei Deutschlands）の依嘱により、マルクス・レーニン主義研究所が編纂した「ドイツ労働運動史にかんする文書および資料（Dokumente und Materialien zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung）の第二部第一巻（一九一四年七月—一九一七年十月）である。この資料集は、おそらく、一八四八年以後のドイツ労働運動の勃興から現代までの重要な歴史的資料を細大洩らさず収録しようとする企図の結果生まれたものと思われるが、どうしたことか、十九世紀のほとんど全期間から今世紀初頭に跨るとみられる第一部は、まだあらわれていない。本書がその第一巻であるところの第二部は、すでに一九五八年以来、最近までに、三巻にわたる厖大な資料集を出しており、今後筆者はそのそれぞれについて紹介を試みる予定であるが、第二部が先に出て、第一部がまったく出ないのはまことに残念というほかはない。これは二十世紀に入ってからは、資料の量も厖大である反面、入手し易いので比較的早く出版されたという事情もあろうが、やはりこれには統一社会党政府の政治的な意図が反映しているのではなかろうか。

しかしいずれにしても、ドイツ民主共和国（＝東ドイツ）において、労働運動史の文書的研究が非常に盛んであることは喜ばしい。すでに筆者は、ベルリンのドイツ科学アカデミーの歴史学研究所の編集になる資料を数回にわたって紹介したが[1]、また最近では、「十月革命のドイツに及ぼした影響」と題して、四巻から成る浩瀚な資料を出していることは注目に値する。われわれは、第一次世界大戦勃発直前の一九一四年七月から、ロシアにおけるボルシェヴィキ革命までの期間を網羅する本資料の内容に入るに先立ち、国際的労働運動の発展とそのなかにおけるドイツ労働運動の役割、ドイツ社会民主党の第二インターナショナルにおける地位などについて考察する

ことを通じて、第一次世界大戦の勃発後、第二インターの崩壊にともなう社会民主党指導部の労働者階級への背信の基盤となった日和見主義＝社会排外主義が、いかにして醸成せしめられたかを、本資料の吟味の前提として、歴史的に探求してみたいと思う。

(1) ドイツ社会運動史にかんする最近の資料（その二）—社会主義鎮圧法の時期におけるドイツ社会民主党の闘争—帝国委員会の活動（三田学会雑誌、第五二巻第十号所収）、第一次ロシア革命（一九〇五—一九〇七年）のドイツに及ぼした影響—ドイツ社会運動史にかんする最近の資料（三ノ一および二）（三田学会雑誌第五三巻第一号および第二号所収）

二

第一次世界大戦勃発までのドイツ労働運動の歴史は、つぎの各時期にわけるのが適当であると思う。すなわち、

第一期、十九世紀初頭から一八七五年まで

第二期、一八七五年から一八九〇年まで

第三期、一八九〇年から一九一四年まで

第一期は、ドイツ労働運動の黎明期にあたり、一八四八年の革命以後、ケルンの共産党裁判の陰謀事件[1]によって、社会主義運動は退潮期に入っていった一方、労働組合の先駆的萌芽形態としての労働者教養団体[2]（Arbeiterbildungsverein）も各地に発展し、これにフ

エルディナンド・ラッサールの国家社会主義が結びつくことによって、一八六三年五月二三日、ライプツィヒにおいて、「全ドイツ労働者協会」（der Allgemeinen Deutschen Arbeiterverein）が結成された。これはのちに一八七五年、アウグスト・ベーベルとウィルヘルム・リープクネヒトによって一八六九年に建設された「社会民主労働党[3]」（Sozialdemokratische Arbeiterpartei）とゴータにおいて合同し、ここにドイツ社会民主党と改称し、いわゆるゴータ綱領を採択した。ラッサール主義とマルクス主義との折衷ないし妥協の産物としてのゴータ綱領は、マルクスおよびエンゲルスのはげしい批判をあびたが[4]、このことはドイツ労働者階級の運動が、未だ明確にマルクス主義の基盤に立っていなかったこと、従って理論的に未成熟で小ブルジョア的日和見主義や改良主義などの挾雑物によって、その階級的性格が曖昧にさせられていたという事実にほかならなかった。

第二期すなわち、一八七五年のドイツ社会民主労働党の成立から、一八七八年ビスマルクによる苛酷な弾圧、いわゆる社会主義鎮圧法のもとにおける党組織の壊滅、党の再建[5]をへて、一八九〇年合法化を獲ちとるまでの十数年は、世界資本主義体制の強力な一環としてのドイツ資本主義は、イギリス資本主義と角逐し、その墨を摩するに至った。一八四八年の革命当時ユンカーの下僕でしかなかったブルジョアジーは、資本主義の帝国主義への移行とともに、いまやドイツの政治的権力の支配者としての地位を築き、植民地の獲得にも

のり出していた[6]。他方、ドイツ労働者階級の運動も、社会民主党が禁圧されたにもかかわらず、次第に強力となり、階級闘争ははげしくなった。社会民主党を先頭とするドイツ労働者階級の果敢な抵抗は、第二インターナショナルを通じて、世界の勤労大衆に大きな感銘をあたえた。だが同時に、この社会主義鎮圧法下の苦闘の時代に、前衛政党としての社会民主党内部には、内紛がおこりはじめ、とくに一八八三年三月二九日、党大会がコペンハーゲンで開かれたとき、社会主義鎮圧法の苦痛から逃避するために、ビスマルク絶対主義政権に屈服して合法新党を結成しようとする日和見主義的な動きが活発となった[7]。このことは、エンゲルスが、一八八三年から一八八七年にかけて、社会民主党の指導者ベルンシュタイン、ベッカーおよびベーベルにあてた書簡からも明らかである[8]。一八八〇年以後のドイツ社会主義運動におけるこのような分裂の表面化は、苛烈な弾圧のもとにおいてのみわずかに糊塗できたものであったが、社会主義鎮圧法が撤廃された一八九〇年以後その内紛は一層ひどくなり、やがてドイツ革命の悲劇へつらなるものとなった。このような社会主義の左右両翼への分解は、労働組合運動にも波及せずにはおかない。一握りの労働貴族層を代表するにすぎない右翼社会民主主義者が、たまたま有力な指導者であった場合、分裂の危機は次第に濃厚となるのが常であるが、このような傾向は、ひとりドイツ社会民主党のみならず、のちのイギリス労働党、フランス社会党の場合も例外ではなかった。

第一次世界大戦の勃発とドイツ社会民主党

第三期、一八九〇年、エルフルト綱領の採択から第一次世界大戦の勃発までの二五年間は、帝国主義段階への突入にともなう諸矛盾の激化、すなわち㈠階級的対立の一層の激化、㈡労働貴族層の形成と不熟練労働者の窮乏化、㈢植民地争奪のための帝国主義戦争の切迫、㈣議会民主主義にたいする勤労大衆の幻想、㈤軍備拡張にともなう軍需予算の膨脹と全体としての労働者階級の窮乏化の促進などの、独占資本主義段階において、いずれの国にもみられる諸特徴がドイツにおいては、益々明白となった時期に相当する。そしてそれと同時に、エンゲルスが、「一八九一年の社会民主党（エルフルト）綱領草案の批判」のなかで、「こんどの草案は、いままでの綱領〔一八七五年のゴータ綱領〕とちがって、ずっとよくなっている。時代おくれの伝統——固有の意味でのラッサールの伝統も、また俗流社会主義的な伝統も——のつよいなごりは、根本的に一掃されている。その理論的な面についてみれば、この草案は全体として今日の科学の基礎にたっている」と指摘したように[9]、たしかに、かつての「ラッサール崇拝」は衰えたにもかかわらず、その思想は依然としてドイツ社会主義のひとつの流れ——たとえばオイゲン・デューリングの思想を想起せよ——のなかに生きており、またイギリス社会主義の理論的伝統、フェビアン協会の漸進主義を、社会主義鎮圧法下の亡命中に洗礼をうけたベルンシュタインは[10]、公然として修正主義論争の口火をきったのであった。われわれはいまここで、修正主義論争が、ドイツ社会主義運動の歴史において、どのような意義を有

するものであるか、それはどのようにして展開され、どのような衝撃を労働者階級にあたえたか、これらの点について分析することを目的とするものではない。それはたしかに、ドイツ社会民主党の歴史の上で画期的な事件であり、社会民主主義の運命を象徴するきわめて興味ある問題であるが、ここではただ、国際社会主義運動において圧倒的な指導権と影響力とをもつドイツ社会民主党内部に、その理論の根本的修正が、有力な指導者とそのグループによって提唱されたという事実は、一体何を物語るか、この問題に限定して論ずることとしよう。このことを通じてわれわれは、はじめて第一次世界大戦の勃発と第二インターナショナル崩壊の必然性についての明確な認識に達することとなるからである。

一八四八年の深刻な経済恐慌と政治的な危機を経過して以来、一八六〇年代に至って、ヨーロッパとアメリカの資本主義は、いわゆる相対的安定期に入り、労働者階級の運動の目標も政治的社会的な変革から経済的な要求に移行してゆく傾向を示した。一八七〇年にはヨーロッパ各国では、職業別もしくは産業別に労働組合が確固とした地盤を築き、最低賃金制や八時間労働制の獲得などが当面のスローガンとして掲げられていた。資本家階級も、たとえばイギリスにおけるように労働者階級にたいし、労働市場を支配する全国的職業別組合を、商品としての労働力の売買をめぐる交渉相手として認めるという意図のもとに、法的承認を譲歩したのであって、[11] またドイツにおいては、社会主義鎮圧法によって、社会民主党を非合法化の状態のもとに追いやりながら、上から、社会保険法をもって、労働者保護立法を支柱として、社会政策を展開しはじめたのであった。[12] このような資本主義の発展とこれに対応する社会政策の実現は、労資対立の緩和、すなわち「産業の平和」という資本家的目的に即応すると同時に、実に労働者階級をして、彼らおよび彼らの先達者たちが、長い間の苦しい闘いの過程のなかで獲得し、もしくは資本家側の譲歩を獲ち取ったもろもろの権利が、あたかも資本主義の発展が自動的にもたらしたものであり、また資本主義の上昇および発展によって、将来もなおそのような可能性が労働者階級に恵まれるものであるかのような幻覚をあたえたことは疑いえない。[13]

ここには労働組合をもって政治からきり離し、経済的要求の枠内に組合の活動を閉じこめようとする労働貴族的な組合指導者の特権化した意識が横たわっていることはもちろん、このような指導者にこそ、労働組合の支持をえて社会民主党の指導者への途が開かれたのであった。してみれば、ドイツ社会民主党内部における左右両派の対立が、一八八〇年代以後にわかにはげしくなり、ついに一八九〇年代、いわゆる修正主義論争を契機として表面化したという事実は、労働組合運動の指導者における右翼日和見主義的傾向とまったく無縁ではありえない。

労働組合運動における政治と経済の分離、階級闘争の否定、そしてマルクス主義の修正、これらは、ひとりドイツ社会民主党とドイツ労働運動にのみ特有な現象ではなかった。当時、社会民主主義政党こそ結成されていなかったけれども、イギリスにおいては、自由党左派（＝ブルジョア急進主義者）と労働組合主義者との関係は、きわめて密接で、労働組合の指導者は、自由党として議席を保持したことはよく知られている。エンゲルスは、一八七九年に、ベルンシュタインあての手紙のなかで、「現在のイギリスには、大陸でいわれている意味での真の労働者階級の運動はないことを認めなければならない」とのべているが、まさにその通りであった。

すでに国際社会主義運動の指導的な推進勢力としてのドイツ社会民主党とイギリス労働運動にして、このようであったとすれば、一八八九年七月、フランス大革命を記念してパリで創立された第二インターナショナルが、いかに決定的にマルクス主義的志向に傾いていたとしても、それが、帝国主義戦争の切迫という緊張した事態に直面し、これを阻止するための有効適切な措置として、「政治的なゼネラル・ストライキ」や、「資本主義打倒のために、帝国主義戦争を内戦に転化する」ことなど、たんなる決議のための決議でしかなかったことはいうまでもない。一八九一年、一八九三年、一八九六年の三つの大会における「ゼネラル・ストライキを戦争反対の武器とすること」にたいする圧倒的な否決や第一次世界大戦の気運の濃厚となった一九一二年のバーゼル会議の宣言の運命が、このことを如実に物語ってはいないだろうか。

レーニンは、このような日和見主義を定義して、「日和見主義とは、大衆の根本的な利益を、労働者のうちのとるにたりない少数者の一時的な利益の犠牲にすることであり、いいかえれば、プロレタリアートの大衆を敵として、一部の労働者とブルジョアジーとが同盟することである」とのべているが、[14] 労働運動におけるこの日和見主義が、「社会主義諸党の内部で、いままでどおりの存在をつづけられなくなったほどに成熟したとき、それは社会排外主義」[15] となるのであって、第一次世界大戦直前のドイツ社会民主党内部における左派、中央派および右派の分裂、そのイデオロギー的な相剋の背後には、中央派（日和見主義者）カール・カウツキー、アウグスト・ベーベル、左派（正統派マルクス主義者）ローザ・ルクセンブルク、クララ・ツェトキン、カール・リープクネヒト、フランツ・メーリング、右派（改良主義者）エドアルト・ダヴィッド、ウォルフガング・ハイネ、カール・レギエンらの派閥的な抗争の根源としての日和見主義＝社会排外主義をめぐる戦術的な問題が、さけがたいほどに表面化したことを物語っている。このようにして、第二インターナショナル崩壊への途は、急速に掃き清められたのである。

（1）この研究については、最近つぎのようなものがでている。Der Kommunistenprozess zu Köln 1852 im Spiegel der Zeitgenössischer Presse, herausgegeben und eingeleitet von Karl Bittel, 1955, Berlin (Rütten und Löning). Rudolf Hermstadt; Die erste Verschwörung gegen das Internationale Proletariat, Zur Geschichte des Kölner

Kommunistenprozesses 1852, 1958, Berlin (Rütten und Löning)、前者はこの裁判にかんする当時の新聞などの資料を集めた史料的なものであり、後者は、一八四八年後のドイツの社会経済史および政治史の分析を通じてこの事件の真相をえぐり出そうとしている力作である。

（2）これにかんする最近の研究としては、Karl Obermann; Die Deutschen Arbeiter in der Revolution von 1848, が興味深い。三田学会雑誌第五一巻第六号所収拙稿参照。

（3）黎明期のドイツ労働運動におけるリープクネヒトとベーベルによるマルクス主義的な労働者政党建設のための闘争については Karl-Heinz Leidigkeit; Wilhelm Liebknecht und August Bebel in der deutschen Arbeiterbewegung, 1862–1869, 1957, Berlin (Rütten und Löning) が面白い。三田学会雑誌第五二巻第十一号所収拙稿を参照。

（4）マルクスは、アイゼナッハ派の指導者のひとりウィルヘルム・ブラックにあてた手紙のなかで、この綱領の原則的な誤りについて非難したのち、「とにかくこの綱領は、ラッサールの信仰箇条を礼讃している点は別としても、何の役にもたたないものである」とのべた（大月版、マルクス・エンゲルス選集、第十二巻上、プロレタリア党のための闘争、二三一—二三三頁。）

（5）社会主義鎮圧法下の社会民主党の果敢な闘争についての最近の研究としては、Ernst Engelberg; Revolutionäre Politik und Rote Feldpost, 1878–1890, 1959 (Akademie-Verlag. Berlin) があるが、なお資料的研究として、K. A. Hellfaier; Die deutsche Sozialdemokratie während des Sozialistengesetzes, 1878–1890, Ein Beitrag zur Geschichte ihrer illegalen Organization und Agitationsformen, 1958, (Veb Deutscher der Wissenschaften, Berlin) は注目に値するし、さらに重要な資料として Leo Stern; Der Kampf der deutschen Sozialdemokratie in der zeit des Sozialistengesetzes, 1878–1890–Die Tatigkeit der Reichs-Commission も面白い。この最後のものについては、三田学会雑誌第五二巻第十号を参照されたい。

（6）たとえば東アフリカにおける植民地獲得の努力をみよ。これについての最近の注目すべき労作に、Kurt Büttner; Die Anfänge der deutschen Kolonialpolitik in Ostafrika—kritische Untersuchung an Hand unveröffentlichter Quellen, 1959 (Akademie-Verlag. Berlin) がある。

（7）August Bebel; Aus meinem Leben, Bd. Ⅲ, S. 22 f.

（8）大月版「マルクス・エンゲルス選集」第十七巻「ドイツ社会民主党にかんする手紙から」を参照。

（9）大月版「マルクス・エンゲルス選集」第十七巻所収「一八九一年の社会民主党綱領草案の批判」参照。

（10）この過程は、ベルンシュタインの「追放の時代」Eduard Bernstein; My Years of Exile (English translation by B. Miall), 1921. に明らかである。

（11）一八七一年の労働組合法の改正を意味する。

（12）大河内一男「ドイツ社会政策思想史」がこの問題にかんする重要な文献である。

（13）カール・レギエンは、そのパンフレットのなかで、「日和見主義的なベルンシュタイン理論をむきだしにあらわし、労働者の状態は、資本主義のもとで根本的によくなっているし、今後ともかぎりなくそれはつづくだろう」といった。労働組合はすでに前進への道をひらいたというのが、彼の主張であった。（W. Z. Foster; History of the Three Internationals, 1955. 長州一二・田島昌夫共訳「国際社会主義運動史」（大月書店）二三四—二三五頁。

（14）大月版「レーニン全集」第二一巻所収「第二インターナショナルの崩壊」二四二頁。

（15）前掲書二四四頁。

三

「ドイツ労働運動史にかんする文書および資料」二巻、一九一四年七月—一九一七年十月（Dokumente und Materialien zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, Band 1, Juni 1914–1917）と題するこの史料は、七六〇頁、二四四項目からなるまことに厖大なものであり、第一次世界大戦勃発直前および直後における第二インターナショナル崩壊の直接的な契機となったドイツ社会民主党のプロレタリア国際主義にたいする裏切りから、大戦の末期ボルシェヴィキ革命勃発までの重要な文書的史料をのせている。はじめに、マルクス・レーニン主義研究所の序文が掲げられているが、そのなかに、つぎのようにのべられているのは、この史料集が企図された目的が明瞭に認められる。すなわち、つぎのようにのべられている。

「一九一四年八月四日、右翼の政党および労働組合の指導者の裏切り、その国家機関との協力、それば かりか反対党の社会民主主義的な党組織に敵対するその専断行為が、一連の典型的な史料を通じて証明されよう。

特別に重要な課題が、機会主義者のもっとも危険な変種としての中央派の政治的な役割を発見することのうちに見出された」と。

この序文につづいて、編集の最高責任者と思われるウォルター・バルテル教授（Prof. Dr. Walter Bartel）によるかなりの分量の内容紹介のための解説がつけられているが、この論文は、一、第一次世界大戦の犯罪、二、インターナショナル・グループの形成、三、プロレタリア国際主義の旗のもとに、四、大衆行動のための運動から、五、ロシア革命の徴候の各節から成る四〇頁ほどのものである。すでに「戦争と軍国主義に反対して闘うドイツ社会民主党左派」（W. Bartel; Die Linken in der deutschen Sozialdemokratie

im Kampf gegen Militarismus und Krieg, 1958)の著者として、その業績を高く評価されているバルテルの紹介によって、われわれは、この史料集により容易に近づく機会を得るのである。

しかし筆者は、本書の全体について、くわしく紹介する余裕はない。二四四項目のうち、わずかに数項目を吟味することによって、第一次世界大戦の勃発を中心とする社会民主党の危機を展望し、社会民主主義の本質そのものに肉迫しようとするものである。

第一次世界大戦の勃発直前の一九一二年一一月二四日および二五日、バーゼルにおいて開かれた国際社会主義者会議の特別大会において、帝国主義戦争に反対する決議を採択したが、[1] そのなかで現状分析の結果もっとも強調していることは、バルカンの危機である。すなわちつぎのようにいう。

「すでに今日までに非常におそるべき戦慄をもたらしたバルカンの危機は……、文明およびプロレタリアートにとってもっとも恐るべき冒険となるであろう。それらは、大破局という大事件と非常に些細な利害との間の甚だしい対立を通じて、世界史のもっとも恥ずべき行為となるであろう。それゆえ、会議は、戦争に反対して闘うあらゆる国の社会主義政党と労働組合の完全な団結を、満足をもって確認するものである……。」

このようにのべたのち、バルカン半島の社会民主党には、困難な課題が背負わされていることを論じたのち、戦争阻止の中核となるべきオーストリア＝ハンガリアおよびイタリアの社会民主党員に

は、つぎのように訴えている。

「このことから会議は、オーストリア＝ハンガリアおよびイタリアの社会民主主義者にたいし、彼らの政府の、アルバニアをその勢力範囲にひきこもうとするあらゆる試みに反対して闘い、オーストリア＝ハンガリアとイタリアとの間の平和な関係の維持のための努力をつづけることを要求する。」

さらに会議は、ロシアの労働者の、バルカン支配を狙うツァーリズムにたいする抗議ストライキに拍手をおくると同時に、ドイツ、フランスおよびイギリスの労働者は、バルカンの紛争について自国の中立化のために努力することを要求し、ドイツとイギリスとの軍縮協定実現の緊急事であることを訴えている。

「一方におけるドイツと、他方の側におけるフランスおよびイギリスとの対立の克服は、世界平和にとっての一大危険を除去し、その対立を利用するツァーリズムの権力掌握を震撼し、オーストリア＝ハンガリアのセルビアにたいする侵略を不可能ならしめ、世界の平和を確実なものとするであろう。」

このような現状認識の上に立って、決議は、つぎのような決論をかかげて全世界のプロレタリアートの重大な責任を訴えているのである。

「プロレタリアートは、この瞬間において人類の全将来の担い手であることを自覚する。大量殺戮、飢餓および疫病のあらゆる恐怖によって脅かされているすべての民族の生命の絶滅を阻止するために、プロレタリアートは、その全エネルギーを傾けるであろう。それゆえ会議は、あらゆる国のプロレタリアおよび社会主義者に、この決定的な時期に、われわれの意見をのべるように切望するものである。あらゆる形であらゆる場所において、われわれの意志を宣伝せよ、議会においては、力いっぱいにわれわれの抗議をまきおこせ、大衆を大規模なデモンストレーションに団結させ、プロレタリアートの組織および強さがもっているあらゆる手段を徹底的に利用せよ！　政府が、プロレタリアートの油断のないそして熱情的な平和への意志を、眼の前で見るようにせよ！　搾取と大量殺戮の資本主義的世界にたいして、平和と諸国民の友愛のプロレタリア的な世界を対置せしめよ！

こうした戦争に反対する国際的なプロレタリアートの抗議にもかかわらず、一九一四年、サライェヴォにおけるセルビアの一青年によるオーストリア皇太子夫妻の殺害を契機として、オーストリアとセルビアとの関係が悪化し、オーストリアはセルビアに最後通諜を手交し、しかもセルビアはこれを拒否した。しかもドイツとオーストリアがそれぞれ双方に加担し、激突がさけられなくなるとともに、戦争の危機は一層深まった。このような緊迫した状勢を前にして、一九一四年七月二五日、ドイツ社会民主党首脳部は、迫り来る戦争の危険に反対するために、ドイツの労働者にたいし大衆ストライキをよびかけたのである。そのなかでつぎのようにのべている。[2]

「階級意識に目覚めたドイツのプロレタリアートは、戦争煽動

者の犯罪的な活動にたいし、人間性および文化の名において、燃えるようなはげしい抗議をおこすのだ。そしてドイツ政府にたいし、オーストリア政府にたいして平和の保持のために影響をあたえることを不可避ならしめることが必要である。またもし恥ずべき戦争が阻止しえないような場合にも、すべての戦争の干渉を放棄されることが必要である。ドイツ兵の血の一滴も、オーストリアの権力者の権勢慾、帝国主義的な利益にあずかる人々の犠牲に供されてはならない。」

この呼びかけに応じて、労働者大衆の戦争反対の抗議の波は、ドイツ全土をおおい、この勢いに乗じて、労働者階級の革命的な中核は、戦争に反対する決定的な措置をとろうとしたのであるが、しかしすでにこのとき、ドイツ社会民主党右派の国会議員団は、カイゼルの政府と取引をして、大衆の革命化をおそれる余り、社会主義を裏切ったのである。一九一四年七月二九日付のジューデクム（Albert Oskar Wilhelm Südekum）がときの総理大臣ベトマン・ホルウェーク（Bethmann Hollweg）にあてた手紙からその間の事情を推測することができよう。[3]

「閣下、わたくしは、われわれの今日の相談ののち、社会民主党首脳部とわたくしとの会談の経過について報告致したいと思います……。

わたくしは、党首脳部の事務室で、エーベルト、ブラウン、ミューラー、バルテルおよび国会議員のR・フィッシャーなどの諸

氏に会いました。シャイデマン氏は、ベルリンに行っていて不在でしたし、ハーゼ氏はまだブリュッセルに居ります……。

党首脳部の事務室でわたしは、フォールウェルツの編集長ヒルファーディング博士(Dr. R. Hilferding)が、オーストリアの国籍を有するものとして、追放命令をうけたということをききました……。ヒルファーディング博士は、八日ほど休暇でベルリンから遠ざかっており、従ってフォールウェルツのために何も書いておりませんが、この新聞の編集において、ひきとめ役のような要素を代表しておりましたし、党首脳部の信用のとくに厚い人でした。オーストリアの状態を、彼がくわしく知っていること、そしてまたウィーンの「労働者新聞(アルバイター・ツァイトゥング)」の経営者と連絡をとることによって、彼は、フォールウェルツのなかで、セルビアにたいするオーストリアの苦情を完全に理解して、わが党の生き生きとした平和への熱望を表明しようとしています。そこで彼は、その休暇の旅行への要求が満たされたのでもないのに、その旅行からすぐ帰るように党首脳部からの要請がありました。わたくしはただ、つぎのように云うことができます。この追放は、その目的を破壊し、おそらくは、フォールウェルツの編集において、その論調に影響をあたえないわけにはいかないということです……。」

これをみても、ジューデクムが、社会民主党内部の事情をもらすスパイの役割を果していたことは明らかである。このように、社会民主党内部における日和見主義が、政府との取引となってあらわれたとすれば、一九一四年八月四日、大戦が勃発したとき、その日和見主義が、ついにそのもっとも露骨な形としての社会排外主義となり、帝国主義戦争の正当化にのり出したのは自然であった。つぎにかかげるのは、社会民主党の戦争政策の是認を反映する一九一四年八月四日の「ハンブルク・エコー」の論説の一節である。(4)

「世界戦争がはじまった。われわれすべての者がおそれ全力をつくして反対していたことが、現実となったのだ。戦争がおこっているのだ。ロシアにたいしては日曜日から、フランスにたいしては今日はじまった。何がおこるのか、どうなるのか、われわれは知らない。

しかしながらわれわれは、つぎのようなことを予知している。すなわちドイツはその全力を、ドイツ国民はその最後の人間を、存在かもしくは無かを決定するひとつの闘争に動員しなければならないということを……。

われわれの国土におよぼそうとするツァーの軍隊にたいして、最初の戦闘準備、最初の突撃がむけられたのだ。東部において、海に陸に戦闘がおこなわれている。最初に侵入してきたロシア人は撃退され、ロシアの国境の都市は、ドイツ兵の急速にして有効な反撃によって占領された。ドイツの軍艦は、ロシアの海岸へ全速力で急ぎ且つ闘っている……。

ところで、西部国境が脅かされている。フランスは、公然と通告して攻撃をしかけてきており、その軍隊は、エルザス・ロートリンゲン、南ドイツおよびライン州を突破しようとしている。闘いがはじまったのだ！　いまや、おそるべき大破局の内在的な原因がどこにあるかを議論したり探求したりするときではない。われわれは事実の前に立っているのだ。

悲しいかな、われわれはいま平和と訣別する……われわれは血腥い渦巻きのなかに、突入しなければならぬ。われわれは祖国を防衛しなければならないのだ……」(傍点筆者)

ここには、プロレタリア国際主義が完全に無視され、盲目的愛国主義(ショーヴィニズム)だけが熱狂的に絶叫されている。祖国防衛！「鉄鎖のほか失うべき何物をもたない」プロレタリアートを、社会排外主義＝ショーヴィニズムにかりたてたものは、まさしく右翼社会民主主義者の裏切り的行為であったことは疑いえない。祖国防衛！　この美しい言葉が、いかに破壊的な影響を人類にあたえたか、この深刻な教訓を第一次世界大戦は教えたが、この魔呪的な言葉は、いまもなお、意識のおくれた大衆をして、戦争への熱狂にかりたてる恰好なスローガンでさえある。第二インターナショナルの崩壊の原因となった社会民主主義者のいままで類例のない裏切行為にたいしては、レーニンが鋭く分析したことはよく知られているが、要するにこの根底にあるものは、すでに指摘したように、労働組合運動における日和見主義の浸透である。機会主義的なイデオロギーに影響された熟練労働者層の一部（＝労働貴族層）の社会主義から社会改良主義への志向、そしてさらにこれが社会排外主義に転化するのであって、カール・レギエンなどはその代表的な人物であった。

これにたいし、革命的な労働者の先頭に立って、反戦・反帝国主義・革命的社会主義の立場を堅持したのは、ローザ・ルクセンブルク(Rosa Ruxemburg)、フランツ・メーリング(Franz Mehring)、エルンスト・マイエル(Ernst Meyer)、ヘルマン・ドゥンカー(Hermann Duncker)、ウィルヘルム・ピーク(Wilhelm Pieck)らの社会民主党左派のグループであった。彼らは、大戦が勃発した八月四日の晩、ローザの家に集まり、社会民主党を脱党することによって、反動的な右派および日和見的な中央派と訣別するか、それとも党内にとどまるかを協議したのだが、結局、左派として党内にとどまり、全国の左翼勢力を結集することによって、右派および中央派と闘う態度を決定したのであったが、この左翼社会民主主義者のグループの発展にとってもっとも決定的な事件は、カール・リープクネヒトが、一九一四年九月二一日、シュトゥッガルトで開かれた社会民主党支持者大会において、社会民主党の国会議員団の裏切りに対しておこなったはげしい弾劾演説であった。(5) その報告書の一節には、つぎのようにのべられている。

「九月十八日には、都市委員会(Sitzung des Städtischen Komitees)が開かれたが、そのなかには、つぎのような発言は、注目すべきことである。すなわち、ウェストマイアは、報告者としてのカール・リープクネヒトとの公けの集会を催そうと計画した。ウェストマイアがくわしくふれているのだが、わたくしは、

同志リープクネヒトに、旅行中に会ったことがあるので、その問題について話す機会をえた。彼は何よりもまず、つぎのようなことを私に報告してくれた。『議会民主党内においては、かくもしばしば賞揚された一致というものが、もはや存在しないこと。十四人の同志が軍需予算の協賛にたいして鋭い抗議の声をあげたのであって、そのなかには、ハーゼも入っていた。わたくしは、このような歴史的な瞬間に、社会民主党国会議員団の党派的な強制に加わることはできない』……。」

これは一九一四年の第一回臨時軍事予算に反対した社会民主党左派の英雄的な闘争の報告であるが、十二月二日には、第二回の軍事予算の提案がなされたが、リープクネヒトは、これに反対声明を発する国会議員の新たなグループを獲得しようと努力したがえられず、結局彼の単独の声明は発表することを禁止された。しかしそれにもかかわらず彼は、最後まで徹底的に戦争予算に反対する唯一人の社会民主党員として、社会民主党執行部にたいし、つぎのような抗議文を発したのである。(6)

「社会民主党国会議員首脳部へ

同志諸君

昨日の議会における投票の際に、わたくしは逼迫の状態におかれました。軍事予算の提案の拒否は、わたくしの信念に従えば、党の綱領および国際的な会議の結論によって示されたものであります。わたくしは、党の綱領の精神とこの国際的な会議の決議の

精神に従って活動すべきものであると考えます……。

わたくしは、国会議員団(フラクツィオン)から、異なった投票の許可を得ようと努力しました。しかしそれは、許可をあたえられませんでした。たとえ現在の場合、その重要性や内部的な困難において全く一致したとしても。それは一八七六年の党大会の決議に拘束されませんでした。この決議は、国会議員団を、党の決議にたいする規律違反という手段をもってしては、強制できるものではありません。だが、国会議員団こそ、根本的な党の決議にたいする重大な違反であります。」

カール・リープクネヒトの軍事予算の徹底的な拒否の闘いは、全世界に、ドイツの革命的なプロレタリアートの中核が、なお孤塁を守って奮戦しつつあることを示した。一方この重大な時にあたり、カウツキーを指導者とするいわゆる中央派の行動にたいしては、ロンドンの新聞「レーバー・リーダー」の編集部におくられたメーリング、ローザ・ルクセンブルク、リープクネヒトらの書簡に明らかに示されているように、カウツキーの裏切りとして、はげしい非難があびせかけられた。

これにたいして、カウツキーはどのような態度をとったであろうか。一九一四年十二月二八日、カウツキーが、ヴィクター・アドラー（Victor Adler）にあてて書いた手紙のなかで、彼が何故に、軍事予算の提案に賛成したか、またリープクネヒトとローザ・ルクセンブルクにたいしてどのような立場をとったかを書いているが、これは非常に面白いので、最後に一節をぬいてみよう。(7)

「社会民主党の議員団が、新しい予算を承認するであろうということは、まったく疑いない。わたくしは今回、ハーゼと意見をともにしていることは、個人的に喜ばしい。八月三日には、われわれは対立関係におちいり、非常に不愉快であった。なぜなら、指導的な人々のなかでも、彼は非常にすぐれた賢明な人であるからである。人がどのような情況のもとで同意するか、問題は明白である。わたくしは、八月三日のわたくしの提案について、人々はすでに、総理大臣が言明しているように、ドイツは、どんな併合も、他の民族のどのような迫害も意図するものではないということを承認することを明らかにしたということに立ち戻って論じたいと思う。そしてこのような声明は、外国にたいしてもっともよい印象をあたえドイツにたいする同情を強め、さらに平和のための運動を容易にするにちがいない。」

以上は、冒頭のほんの一節にすぎないが、カウツキーが、マルクス主義をすてて、たしかに日和見主義に堕落してしまっていたことは、想像に難くない。

(1) S. 3. (Dokument 1), Manifest des Ausserordentlichen Internationalen Sozialistenkongresses zu Basel vom 24. und 25. November 1912 über die Kriegsgefahr und die Aufgaben des internationalen Proletariats.

(2) S. 11 (Dokument 3), Aufruf des Vorstandes der SPD vom 25. Juli 1914 zum Massenprotest gegen die Kriegsgefahr.

(3) SS. 17-18 (Dokument 7) Brief Südekums vom 29. Juli 1914 an den Reichskanzler, vom Bethmann Hollweg, über seine im Auftrage der Regierung geführte Besprechung mit Mitgliedern des Vorstandes der SPD.

(4) S. 24 (Dokument 10) Artikel des „Hamburger Echos" vom 4. August 1914 zur Rechtfertigung der Kriegspolitik der Sozialdemokratie.

(5) SS. 34-35 (Dok. 17) Bericht über die Sitzung der sozialdemokratischen Vertrauensmänner Stuttgarts vom 21. September 1914, in der Karl Liebknecht zur Haltung der SPD am 4. August 1914 Stellung nahm.

(6) SS. 66-67 (Dok. 31) An den Vorstand der sozialdemokratischen Reichstagsfraktion gerichtes Schreiben Karl Liebknechts zu seiner Verweigerung der Kriegskredite am 2. Dezember 1914.

(7) S. 75 (Dok. 27) Aus einem an Victor Adler gerichteten Brief Kautskys vom 28. November 1914 über die Kreditbewilligung und seine Stellung zur Liebknecht-Luxemburg-Gruppe.